



Vol.43

2022年8月31日

日本災害復興学会

News letter

目次 -contents-

1 京都大会はんへのお誘い
矢守克也

2 大会概要

3 分科会概要

4 東北から未災地への伝言
日常の地域課題に取り組みこの重要性
一災害発生後の財政健全化施策に翻弄されないために
福留 邦洋

5 復興スケッチ
「通い一次産業」襲う円安
中島 みゆき

6 復興から平時、そして持続へ
一災害によってつなげた多様な担い手を取り込む
「代議的持続」に向けて一
田口 太郎

7 復興若者通信
球磨焼酎を通じた復興支援
諏訪原 夏海
南阿蘇と共に元気に
小澤 優香
水嶋 加那美
桑嶋 雄一郎
西原 寛人

8 法制度と現場
熱海市伊豆山地区土石流災害の
長期避難世帯について
後藤 真理

味な復興
白旗満幹 / 水産の街 五感で満喫
須藤 宣毅

発行人 矢守克也
〒662-8501
西宮市上ヶ原一番町1番
155号 関西学院大学災害復
興制度研究所気付
TEL: 0798-54-6996
FAX: 0798-54-6997
https://f-gakkai.net/

※学会現況 (2022年8月31日)
現在の会員 428
正会員 387・学生会員 37
購読会員 1・賛助会員 3

京都大会はんへのお誘い

大会実行委員長 (京都大学防災研究所教授) 矢守 克也

マスクなしでは生活できなくなった。この状況は、腐海が放つ瘴気から身を守るために防毒マスクが手放せなくなった未来世界を描く「風の谷のナウシカ」(宮崎駿・作) そのものではないか…と、ここまでは、多くの人が指摘していることである。

先日、「ポストコロナの生命哲学」(福岡伸一・伊藤亜沙・藤原辰史著)を読んでいると、その先へ向けたヒントが記されていると感じた。よく知られているように、「風の谷のナウシカ」で、腐海やそこに暮らす王蟲は、私たちにとって自然一般がそうであるように、人類の生活や幸福に対して両義的な意味をもっている。それらは単純に害毒だけをもたらすわけではないが、一方的に利益だけをもたらすわけでもない。

このとき、人類と腐海(王蟲)との仲介役たらんとするナウシカが、王蟲のことを「この子」と呼んで、彼らの話に耳を傾けたことが死活的に重要だという。これは、精神障害等をかかえた当事者が作るケアの共同体である「浦河べてるの家」が展開してきた「当事者研究」で、参加者たちが自らや仲間を苦しめる症状を、たとえば「幻聴さん」などとまるで親しい知人のように呼ぶのと通じる。

症状や課題というラベルを人や地域に貼るのではなく、症状や課題自体を「人」として扱う。こうした姿勢を通してはじめて、まるで接点がなさそうな相手、また、解決の糸口すら見えない課題との対話が可能になる。症状や課題ではなく、具体的な「声」が聞こえてくる。災害時要

支援者(の一人)ではなく「〇〇さん」と、帰還困難区域(の一つ)ではなく「××集落」と言葉を交わそうというわけだ。

ところで、京都や大阪を含めた関西圏には、人だけでなくモノにも「さん」や「はん」をつけて呼称する習慣がある。「田中さん」とか「あんたはん」なども言うが、それだけでなく、「おあげさん」(油揚げ)、「おくどはん」(くど、竈)といった風を使う(接頭辞『お』も加わっている)。モノに、表面のあらわれに尽くせないそれ以上の生命や意志を見て、それに接しようとする姿勢がそこには垣間見える。

みなさまに、JRさん、おけいはん(京阪電車)を利用して、京都府宇治市の防災研究所までお運びいただきそうです。お待ち申し上げます。

大会概要

10月1日(土)、2日(日)に、2022年度大会を京都大学宇治キャンパスで開催します。今回は、3年ぶりの「対面」での開催を予定しております。対面ならではの活発な議論ができるように、新型コロナウイルス感染症への十分な対策も行います。秋の京都でお待ちしております。

対面での開催にあたって従来からのプログラムを一部変更しており、皆様にはご不便をおかけする部分もあるかと存じますが、どうかご理解賜りまして、ご協力くださいますようお願いいたします。なお、今後の感染状況によっては、オンライン開催への変更を行う可能性もございます。随時、学会HPやメーリングリスト等でお知らせいたしますので、ご確認いただきますようお願いいたします。

■開催方式

今回の大会では、口頭発表のみ募集を行います。ポスター発表は募集いたしません。

「対面」開催となった場合は、原則として、発表者も参加者も「対面」での参加をお願いいたします。会場からの質問等も、すべて対面参加の方からのみ受け付けます。ただし、1日目の全体会(分科会のまとめセッション)と、2日目の午後の公開シンポジウムのみ「オンライン配信」を行います。

なお、感染状況を鑑み「オンライン」開催とする可能性があります。どちらの場合となりましても「対面」か「オンライン」の、いずれかのみでの開催とし「ハイブリッド」では行いません。

1日目:10月1日(土)

午前と午後に分かれて分科会および、全体会が行われます。

2日目:10月2日(日)

午前に口頭発表、午後に公開シンポジウムを開催します。口頭発表のプログラム、口頭発表の時間については決まり次第、当学会のウェブサイトで開催しますのでご確認ください。

シンポジウムは「若者の語りのカタチと支える人ー阪神・淡路大震災から27年・東日本大震災から12年ー」と題して、東日本大震災を語る若者とそれを支える大人との対談、阪神・淡路大震災を語る若者とそれを支える大人との対談を通して、若者の語りのカタチと災害復興について考えます。

■エクスカージョン・懇親会

今回の大会では、エクスカージョンおよび懇親会は、感染症対策の観点から実施いたしません。ご了承ください。

■参加費・宿泊

大会参加費は、無料です。予稿集につきましては、今回は印刷版の配布・販売を行いません。事前に予稿集のデータを参加者へ配布いたします。

宿泊については各自での手配をお願いします。秋の京都ですので、旅行者で混み合うことも予想されます。大阪、滋賀、奈良もアクセス可能ですので、ご検討ください。

■アクセス

京都大学宇治キャンパスへは、JR奈良線「黄檗駅」から徒歩約5分、京阪宇治線「黄檗駅」から徒歩約6分です。詳しくは、以下のウェブサイトを参照してください。



<https://www.uji.kyoto-u.ac.jp/campus/access.html>

大学周辺に飲食店やコンビニエンスストアは多くはありませので、両日ともに、昼食や飲み物は各自でご準備いただきますと幸いです。

■新型コロナウイルス感染症への対応

- 参加者には、マスクの着用をお願いいたします。アルコール消毒液は、各所に設置いたしますので、随時、ご使用ください。
- 会場は窓やドアを開放し、空調システム等を使用して常に換気を行います。密にならないように座席を配置します。
- 発熱などをはじめとした普段と異なる症状がある場合には、参加をお控えくださいますようお願いいたします。
- 情勢の著しい悪化がある場合には、リモート開催への変更を行うなどの対応を行います。

分科会概要



本年の分科会は、大会初日の10月1日に、5つの分科会を開催する。各テーマの概要は次の通り。
①は企画者（敬称略）②が趣旨。

生活再建支援のための被災者調査の可能性と課題——「災害ケースマネジメント」実現に向けて

①菅磨志保 関西大学
②「災害ケースマネジメント」の考え方に基づく「被災者の個別の事情に合わせた支援」を可能にする調査のあり方について、東日本大震災以降に登壇者らが実施してきた一連の調査事例を概括的に整理した上で（1）事前に行っておくべきこと、（2）支援活動と調査活動の関係、（3）支援記録の活用可能性とそのための手続等について検討する。

「なまえ」をめぐるダイアログ

①高原耕平 人と防災未来センター
②ものごとの呼び方や名付け方には、そのものごとを捉えることの繊細な意識が見え隠れする。たとえば「3.11」と呼ぶこともあれば、ただ「あの日」と呼ぶこともあるかもしれない。あるいはまた、死者の名や被災地の地名は、「名前」「呼び方」を焦点にして、学会内研究会「上手な思い出し方研究会」のメンバーと分科会参加者が災害復興について対話する場所をひらく。

災害復興における越境的な対話の場の可能性と課題—みやぎボイス10年の取り組みから—

①石塚直樹 東北学院大学
②東日本大震災以降、継

続開催してきたラウンドテーブル型復興シンポジウム「みやぎボイス」の特徴は、立場や専門性を越えて集い、生の声を共有し、記録することにある。

本分科会では、みやぎボイスの企画者・登壇者らが、これまでの10年を振り返り、災害復興における越境的な対話の場が持つ可能性と課題について議論する。

誰一人孤立させない安心して暮らせる社会づくりに向けて～被災者と専門家を繋ぐ経験者から学ぶ～

①宮定章 和歌山大学
②災害時からの復興に向けた住まいの再建時、被災者支援に関わる実践者から『住まいの再建』『コミュニティ再生』の報告から、文明

（支援制度や仕組み）と共に、文明だけでは補えない文化（知恵・精神）にも焦点を充てて、誰一人孤立させない安心して暮らせる持続的な社会づくりについて議論する。

災間の災害復興の課題と可能性

①宮本匠 大阪大学
②佐賀県武雄市は、令和元年8月豪雨、令和3年8月豪雨と、同じ地域が2度水害に見舞われることになった。常に、災害と災害の「間」にあり、被災することが前提となるような災間の時代の災害復興にどのような課題が生じるのか、あるいはどのような可能性を見出すことができるのかについて、武雄市での取り組みをもとに議論する。

日常の地域課題に取り組むことの重要性 —災害発生後の財政健全化施策に翻弄されないために—

岩手大学地域防災研究センター 福留 邦洋

近年の大規模災害では、平成の広域市町村合併と災害対応、復興施策との関係が指摘されることが少なくない。新潟県中越地震で甚大な被害が発生した当時の山古志村が比較的円滑に全村避難できた背景として合併の決まっていた長岡市が受け入れにあたったことが言われている。一方、東日本大震災からの復興の際、合併により周辺地域となったことで旧町村の中心地区の再建が遅れたとの声が聞かれた。広域合併により直後の組織的な災害対応がより迅速に行えるようになった反面、地域性をふまえた復興は広域化、周辺化することで情報共有が難しく、意思決定に反映しにくい状況が生まれたとも言えるかもしれない。

ところで、新潟県中越地震の震源地であった川口町が平成22(2010)年3月に長岡市と飛び地合併したことを覚えているだろうか。山古志村や小国町、栃尾市などが地震発生前から長岡市と合併することが決まっていたが、川口町は加わっていなかった。隣接する小千谷市ではなく長岡市と協

議したことが話題になったが、震災後、急速に合併協議が進展した理由として川口町の財政問題があげられている。震災の復旧・復興過程における起債や町の支出には地方交付税や特別交付税が約9割補てんされた。しかし、地震前の過疎債など地方債の元利償還金は発災5年後から年々増加し、実質公債費比率(財政規模に対する地方債返済額の割合)も20%以上の高止まりが続いた。災害前の借金に災害が拍車をかけたといえるだろう。

東日本大震災では復興交付金により40%の復興事業は国が全額対応することになっており、住民の多くは地元市町村などの負担にはならないと考えている。平成22年度(震災発生前)と平成27年度(発生5年目)、令和2年度(発災10年目)の実質公債費比率を比較すると、陸前高田市18.2%→14.2%→14.9%、大槌町10.1%→11.1%→13.0%、石巻市14.9%→15.2%→9.1%、南三陸町14.2%→9.8%→8.1%とそれぞれ低下、上昇は異なるものの、いずれも20%を下回っている。

財政調整基金(年度間の財源不均衡調整のための積み立て)は、総務省のとりまとめによると、平成28年度の残高が平成18年度比で、陸前高田市1,315.9%、大槌町765.9%、石巻市344.8%、南三陸町1,508.0%と大幅な積み増しを行っている。

ポスト復興に備えていることがうかがわれるが、財政健全化の取り組みは被災地の住民生活にも影響が及んでいる。小学校数は、震災発生から10年間に久慈市19→14、岩泉町13→7、宮古市27→15、大槌町5→1、気仙沼市21→14、石巻市43→33など大幅な再編、統廃合が進められた。人口減少に加え、近年の新型コロナウイルスの影響で公共交通機関の減便、廃止も相次いでいる。拠点病院の見直し、統合により医療圏の広域化も確実に進みつつある。

本来、道路や堤防など社会基盤などの復旧が達成された後、長期間の復興においては、復興基金が効果を発揮する場面である。しかし、東日本大震災の復興基金は、阪神・淡路大震災や新潟県中越地震などと比べると既に大部分が執行され

ており、復旧基金的な色合いが強い。これまでの復興基金は財団法人設立の利子(果実)運用型であったことに對し、東日本大震災は自治体直営の元本取り崩し型という運用形式の違いが強調されるが、問題は運用方式の違いではなく、施策決定までのプロセスのわかりにくさ、見えにくさであることを指摘しておきたい。

厳しい財政状況、長年におよぶ少子高齢化という日常時の課題が災害復興の過程で顕在化、施策修正されようとしている。南海、東南海地震の被災が懸念される地域では事前復興や国土強靱化というキーワードのもと、事前の高台移転や高規格道路の計画、着工が議論されている。発災直後の命を守る、救う取り組みは必要であるものの、その後の長い人生を考えた時、現在の生活問題や課題を明らかにし、解決まで至らなくても緩和する方策を検討し、真摯に向き合うことが重要ではないだろうか。東日本大震災の被災地からはそのことが投げかけられているように思えてならない。

「通い一次産業」襲う円安

東京大学大学院学際情報学府 中島 みゆき

7月24日午前10時、オープン1年を迎えた石巻市の「震災遺構大川小学校」では、語り部活動が行われていた。「大川伝承の会」による定例ガイド、少し前には当時5年生で津波に襲われ助かった只野哲也さんが、高知県黒潮町の職員を案内した。

裏山のコンクリートたたきに立つと、目の前に新北上川と農地の広大な風景が広がる。震災前は140世帯・500人が暮らした釜谷の町は津波によって失われ、跡地に建設された巨大なガラス栽培施設が目を引き。「田んぼは、今は農業法人が耕しています。土地の持ち主は移転しているので耕作を委託しています。ハウスではパプリカやトマトが栽培されています」と、只野さんが説明する。

午前11時半すぎ、語り部ガイドの一行は約3km離れた河口近くの長面地区に移動する。T.P.8.4mの防潮堤に登り、長面の住民で三男を亡くした三條すみゑさんが震災当時の様子や大型インフラ工事で様変わりした地域について説明する。目の前には地元で「レインボーブリッジ」と呼ばれる巨

大橋梁がかかり、今年度中の開通を目指して、工事が休日返上で行われている。足下では低平地のかさ上げ工事が進む。

大川小の校区、大川地区では、海に近い4つの集落が災害危険区域に指定され、約400世帯・1000人が内陸に移転した。1998年から418ヘクタールにおよぶ大規模圃場整備事業が行われ、完成直前に津波被害を受けた。換地前だったため宮城県が復旧工事を行い、現在は震災後に設立された地元農業法人「株式会社宮城リスタ大川」が主に稲作を行っている。8mほど地盤沈下した長面でも昨年度から稲作が始まり、「県内最後の農地復旧」となった。

ガラス製ハウスは「株式会社デ・リーフデ大川」がオランダ式栽培技術を導入して、昨年からは生産が始まった。約2.4ヘクタールの温室は、国の「産地生産パワーアップ事業」により建設され、第1温室（大玉トマト）、第2温室（ミニトマト）、第3温室（パプリカ）と出荷調整エリアで構成される。温度湿度などの生産環境は、センサーによって制御されている。3～4年前から集落



大川小学校の裏山から見た釜谷地区。かつての家並みがあった場所にガラス製の栽培施設、その背後に復旧した水田が広がる

跡地利用の一環として検討されてきた。現在は近隣からパート含め18人が働いている。

河口近くの尾崎・長面集落では、昔から半農半漁の暮らしが営まれていた。震災後、漁師は移転先から30分ほどかけて車で「通勤」し、主に牡蛎養殖を営んでいる。かつては一生、海にかかわる仕事ができただけ、今は運転ができなくなれば海に來られない。一人、また一人と引退し、その筏を引き受けた若手漁師、小川英樹さんが水域の3割ほどの筏の生産を担う。漁協運営委員長も務め、多忙を極める。この週は、工事の土砂が雨で漁場に流れ込む対策の申し入れを行った。

背景はそれぞれ異なるが、大川地区では震災後、一次産業の大規模集約化が起こった。そこに今、ウクライナ侵攻や円安による燃料や肥料の高騰が、襲いかかっている。

リスタ大川の大槻幹夫代

表によるとこの春来、肥料のうち尿素が1.9倍、塩化カリウムが1.8倍、窒素リン酸カリが1.55倍……と値上がりしている。今期の肥料は値上げ前に確保したが、来期の生産コストは2割上がる。2020年度にはコロナ禍による外食産業の需要減から米価が下落し、減反率を増やした。そこに値上げが重なる。ハウス栽培のデ・リーフデ大川も、燃料のLPG（液化石油ガス）や肥料が、今年2月から3割上昇しているという。漁業も燃料や漁具の高騰が、漁家の経営を圧迫している。

コロナ禍、生産コスト高騰……、住めない土地となった「ふるさと」を荒れ地にしないようにと力を注ぐ人たちに、大波は容赦なく押し寄せる。「リスタ」はリスタート、「デ・リーフデ」は日本に最初に来航したオランダ船から名付け「慈愛」を意味する。困難の中、一次産業復興を目指す志の行方を、見守っていききたい。

復興から平時、そして持続へ

—災害によってつながった多様な担い手を取り込む「代謝的持続」に向けて—

徳島大学 田口 太郎

「復興から平時へ」というフレーズは復興まちづくりの場面でよく聞く。しかし、その「平時」のまちづくりはどのように持続するのか。筆者は2007年発災した新潟県中越沖地震で被災した新潟県柏崎市えんま通り商店街の復興支援に参画していたが、発災から15年の月日を経た柏崎市中心市街地における「復興から平時」へ活動が移行していくプロセスを振り返りたい。

2007年7月16日に発災した新潟県中越沖地震は、衰退局面にあった地方都市の中心市街地で大きな被害が発生した点に特徴がある。右肩下がりであった中心商店街の復興は、既存店舗の営業継続の是非や、事業化されていない都市計画道路による建築制限など様々な制約があったものの、市民による復興ビジョンが取りまとめられ、ビジョンに基づいた復興事業が展開された。えんま通り商店街における復興ビジョンでは、被災前の商店街に戻すのではなく、もともと商店街が有していた特性を伸ばすことに

よって、被災前からあった課題の解決を図りながら商店街を再生していこうという商店街の強い意志があり、それは一般に「再生」や「復活」などの用語が使われがちな復興ビジョンのタイトルに「新生」という用語を用いていることにも表れている。

復興ビジョンをベースとした復興事業が進み、商店街の再建や各種プロジェクトが進んだ一方で、商店街の高齢化も着実に進む。2018年には発災以降、復興を牽引してきたリーダーも転出した。こうした中、商店街の理事には復興の支援者側にいた建築士が所属企業から独立して参画。更に筆者の研究室の学生として参画していた卒業生が復興支援ネットワークとして参画。復興支援ネットワークも平時のまちづくり中間支援組織としてNPO法人化(NPO法人aisa)した。被災時と現在では商店街理事メンバーの構成も大幅に変わり、その一角に復興プロセスの中で支援者として参画したメンバーが当事者

として参画するようになった。えんま通りでは、老舗の店主を中心とした理事構成が復興段階から少しずつ変化し、やがて復興を支えてきた側をも取り込み、若く新しい知恵を取り入れている。そして商店街の高齢化は更に進み、支援者と商店街有志が中心となって設立した合同会社が商店街の運営を引き継いでいくという。えんま通り商店街という場自体は変わらない中、その中身を大きく変化させることで時代の変化に対応している。

筆者はこのように代謝しながら持続していく様を「代謝的持続」と名付けることとした。ただ持続するだけではなく、そこに代謝が内包されているか。そこが問われる。では代謝が内包されるには何が必要か。単純に言えば、1. 人材育成能力と、2. 人材の受容力、だろう。前者は組織として若手を育てていくことが出来るか、という能力であり、後者は外部からの新しい風を受容できるか、である。外部から新しい風を受け入れ、そ

れを内部で育てることで、外的なDNAと内的なDNAが混ざり合い、地域のDNAが時代にあったカタチで踏襲されていくことだろう。ここでいう「持続」とは単純な前例踏襲ではなく、メンバーの入れ替わりも含めた代謝的な持続である。代謝を行うには、新しいメンバーの存在とかつてからのメンバーの退場が必要である。地域のアクターが転出したり、他界したりすることをネガティブに捉えるだけでなく、これを代謝の機会としてポジティブに捉えることが重要だろう。転出も必ずしも積極的な転出とは限らず、やむなく転出、というのが現在の転出の素直な動機であると考え、これをポジティブに位置づけてあげることが、これから永く転出した元メンバーとの関係を継続する上でも重要だろう。

代謝なき前例踏襲から、代謝的持続による活力維持へ転換していくことが復興を通じて様々な外部人材とのコネクションを持った被災地の持続を考える上で重要となっていくことだろう。

球磨焼酎を通じた復興支援

熊本大学文学部4年 諏訪原 夏海

大学2年生のとき、令和2年7月豪雨災害が発生しました。発災してから初めて行った災害ボランティアは球磨村一勝地(いっしょうち)の淵田酒造本店でした。家屋は泥で埋まっており、ひっくり返る大きな甕を見ながら、呆然としたのを覚えています。泥をかき、その中から出てくる焼酎瓶をやるせない気持ちで並べていました。その時から人吉球磨との関わりが始まり、ボランティアとして活動してきましたが、現在はそれ以外の形

でも復興に関わっています。それが球磨焼酎です。2021年度の1年間、大学の活動として球磨焼酎の販促に関わってきました。私はその中でも球磨焼酎を使ったカクテル開発班に所属し、熊本市内でのイベントでは、大きく被災した大和一(やまといち)酒造元さんの焼酎を使ったカクテルを提供しました。また、27歳からそれぞれ1つの商品を選び、カクテルを考案した冊子も作成しました。このような活動をしていて強く感じたのは、球磨



焼酎がいかに地元の人から愛されているか、ということです。ボランティアの現場でも、球磨焼酎の話をする、かなり熱のこもった話になります。それだけ人吉球磨の方々に愛され、そして大切なアイデンティティとなっている球磨焼酎を残していくために、魅力をもっと多くの

に伝えたいです。今年度からは新たに球磨焼酎を応援する学生サークル「TORICO」として活動を行っています。被災してもなお、焼酎造りを諦めない杜氏の方々に応援し、人吉球磨という地域が復興していけるよう、微力ではありますが、若者の力を発揮できればと思います。

南阿蘇と共に元気に

阿蘇MIRAI広場

代表	小澤 優香	東海大学農学部3年
副代表	水嶋 加那美	東海大学農学部3年
	桑嶋 雄一郎	東海大学農学部3年
	西原 寛人	東海大学農学部1年

熊本地震からはや6年、新阿蘇大橋も開通し、インフラも整備が進んでいる。地震により東海大学農学部は阿蘇から熊本市内にキャンパスを移し勉学に励んでいる。キャンパス移動後も学生と南阿蘇村の地域の方々と交流を続けられるように「阿蘇復興への道」というプロジェクト(東海大学ユニークプロジェクト)を立ち上げ5年間、復興祭(南阿蘇大復興祭)や語り部など、地元との交流活動を続けてきた。このプロジェクトを立ち上げた初代

メンバーたちは南阿蘇黒川地区の学生村で熊本地震を経験し、我を忘れて真夜中に仲間の救出活動を経験し、その後も黒川に残って住民と被災地の片づけを中心的に行ってきた。プロジェクト活動を通して、地震の経験がない多くの学生や観光客の方に、地震の経験を伝えてきた。最初は復興が目的であったが、活動を行っていくうちに南阿蘇の人の温かさを感じ、地震の経験を通して、よりつながりを持ちたいと考えようになった。今年から発足し



た私たち「阿蘇MIRAI広場」は、「阿蘇復興への道」を引き継ぎ、南阿蘇の方々と交流し明るい未来に向けた活動を行っている。私たちの活動では、地域の方々と学生とのつながりを大切にしており、地域の方々と清掃活動などを行っている。7月には七夕イベントを行い、多くの人の願いを込めた七夕飾りを作成した。

214枚もの短冊が集まり、イベントは大成功で、多くの人の明るい未来に向けたきっかけとなる活動を行うことができた。秋からは地域の方との清掃活動や焼き芋のイベントを開催し、学生と地域の人との交流が深まるようなイベントを行い、これからも継続して南阿蘇を明るく元気にする活動を行っていききたい。

法^① 制度と現場

熱海市伊豆山地区土石流災害の 長期避難世帯について

後藤 真理 (静岡県弁護士会災害対策委員会副委員長)

静岡県弁護士会は、令和3年7月3日に発生した熱海市伊豆山地区土石流災害の被災者支援を行っている。

現在、伊豆山地区は警戒区域の指定がなされており、区域内156世帯のうち全壊認定の74世帯以外の82世帯は、長期避難世帯の認定を受けている。この長期避難世帯の認定までには、様々な行政への働きかけを要した。

相談開始直後から、建物の損壊がない又は軽微だが二次災害の危険等により帰宅困難な住民から、避難所から追い出されるのか、仮設住宅に入居できないのか、という相談が多数寄せられていた。

そこで、当会は市と県に、住宅被害がない帰還困難者への支援措置を申し入れ、その結果、避難所の立退き期限が延長されると共に、

警戒区域の指定により区域内の被災者に仮設住宅の入居資格が認められることになった。

また、建物の被害が半壊以下にとどまる被災者には、被災者生活再建支援金が支給されないという大問題があったため、県の土業有志にて、警戒区域内の世帯を長期避難世帯に認定することを県に申し入れ(長期避難世帯は全壊と同様の支

援金を受給できる)、永野海弁護士や熱海市の高山功弁護士らが個人的なつながりをフル活用して行政やメディアに働きかけ、長期避難世帯の認定がされるに至った。

今後の課題として、警戒区域の解除と共に長期避難世帯認定も解除されると、元の被災地に戻る長期避難世帯が加算支援金を申請する機会を失ってしまうため、当会では、警戒区域が解除されても、伊豆山地区の復興事業が完了して現実に帰還できるようになるまでは、長期避難世帯の認定を解除しないよう県に申し入れを行う予定である。

味^③な復興 白謙蒲鉾／水産の街 五感で満喫

河北新報社防災・教育室 須藤 宣毅

まずはふんわりとした食感、かむほどにほのかな甘みと魚の風味が楽しめる。そんな白謙蒲鉾店(宮城県石巻市)の逸品を30年来、帰省や出張の土産として愛用しています。白謙は大正元年創業の老舗で「極上笹かまぼこ」「白謙揚げ」をはじめ39種類の商品を製造販売しています。ご飯や日本酒のお供はもちろん、白くしっとりとした見た目を含め白身魚のムースと通じるものがあり、ワインにも良く合うと好評です。

2011年3月11日に発生した東日本大震災で、本店と二つの工場がある石巻市中心市部は、震度6弱の揺れと津波に襲われました。主力の門脇工場は1日10万枚を生産する製造ラインが損傷し、2階に避難した社員43人は3日間孤立。本店と本店工場も浸水被害を受けたほか、非番だった1人が亡くなり、休業を余儀なくされました。

再生の挑戦は、建物の泥かきから始まりました。通りがかった地元客の「早くお

宅の蒲鉾を食べさせて」といった言葉や、全国から寄せられた約1万通の応援の手紙が、社員を鼓舞しました。そのような声に応えようと本店工場の復旧を急ぎ、震災から1カ月余りの4月17日、本店で販売を再開しました。商品を2種類に絞った再出発でしたが、地元客が詰めかけ「被災見舞いのお返しに」「自宅用に」と水産の街を代表する味を買いました。

門脇工場は7月7日に製造を再開しました。速やかに

事業を継続できた理由について、白出哲弥社長は「励ましてくれたお客様と、消毒の手配や原料・資材の調達に迅速に対応してくれた取引業者様のおかげです。そして当初、手作業で蒲鉾を作ったり、各種申請に奔走したりした社員の頑張りです」と説明しました。私にとって白謙蒲鉾は今も、土産の定番です。一番のお気に入りには「ミニ白謙揚げ紅しょうが入り」(税込108円)。震災後は、復活のストーリーを添えて渡しています。